

ジェンダーとセクシュアリティを社会哲学するということはどういうことなのだろうか？女性特有の問題や性に関わるトピックについて詳しく語れること？たとえば、体外受精など生殖医療における生命倫理、たとえば従軍慰安婦と戦後責任、たとえば雇用や昇進における女性差別。たしかに、そういったトピックをもっと社会哲学の俎上にあげ、議論していくことは重要だと思う。

けれどもジェンダーとセクシュアリティを社会哲学することは、それだけにはおさまらない。ジェンダーとセクシュアリティが全く関わらないようなトピックなど実はほとんどない。だから、一見ジェンダーにもセクシュアリティにも関係がなさそうなトピックの中からジェンダーやセクシュアリティの痕跡をみいだしてくること、その痕跡に名前を付けること、そして、なぜジェンダーもセクシュアリティもそのトピックに関わりがないように見えてしまうのかということからくりをあぶり出すこと。おそらくそれらの行為の方が、意義がずっと大きいし、トピックを中心とした分析にも新たな視点を提供すると思う。

では、ジェンダーやセクシュアリティの痕跡を見出してくるにはどうすればいいのか。そもそもジェンダーやセクシュアリティの痕跡を見出すとは、どういうことなのか。

1. ある新聞記事

この問いを考えるきっかけとして、小さな新聞記事を取りあげてみたいと思う。ずっと以前に、たまたま読んだのだが、何ともいえない不快感が残った記事である。新聞社に抗議しようかとも一瞬考えたが、怠惰な私は結局スクラップするだけで、現在に至ってしまった。

「男性も奥様も ご注意」

「子宮がん関連ウイルス / 性風俗女性 半数が陽性 / 順天堂大が研究」

子宮がんと関係があるとされるヒトパピローマウイルス（HPV）の感染が広がり、特に性風俗業界で働く女性では約二人に一人が陽性であることが、順天堂大の研究で明らかになった。男性を介して家庭に持ち込まれる可能性もあり、石和久・同浦安病院教授（臨床病理）らは五日、東京で開かれる日本性感染症学会で発表する。HPVは、性交渉などを通じて感染するウイルスで、子宮頸がんの組織から高い率で検出され、がんの前段階である異形成を引き起こすと見られている。（中略）性風俗に携わり、健診を希望する女性二百三十六人を調べたところ、47%にあたる百十二人がHPV陽性とわかった。淋菌は5%、クラミジアは14%だった。

同大浦安病院を訪れた妊婦や子宮がん検診者のHPV陽性率は5%で、性風俗業界で蔓延していることが明らかになった。石教授は「自覚症状もないHPVは、男性を介して気づかないまま感染が拡大している。陽性ならば検査を受けることが必要」と話す（1）。

この記事を読んで、あなたはどうかだろうか？「なぜ不快にならなければいけないの？」と思う人もいるかもしれない。

私が不快感を覚えたのは、調査やその内容、調査を行った教授に対してではない。不快のもと、新聞記事における書き手と読者の位置の想定のおそれであり、その語り口から見えてくる書き手の暗黙の前提である。

まず、書き手と読者の位置について試してみよう。ここで想定されている読者は「男性」と「奥様」である。新聞の読者の中に「性風俗女性」は存在しないようだし、「性風俗女性」と「奥様」のどちらにも属さない女性も想定されていない。

次に暗黙の前提である。女性は「性風俗女性」と「奥様」にきれいに分かれ、混じることはない。その間をつなぐものは「男性」のみである。ウイルスの流れは「性風俗女性」「男性」「奥様」という一方通行である。図式でいえば加害者は「性風俗女性」、被害者が「奥様」となり、男性は媒体にすぎない。そして、この記事が発するメッセージは、「奥様」たちの健康が脅かされているということである。

けれども、ウイルスは人間の体の中で自然発生はしない。「性風俗女性」にウイルスをうつしたのは誰なのか？彼女たちのウイルス感染率が高いとしたらそれはなぜなのか？セーフセックスを実行しようとしなかったのは誰なのか？なぜ女性は「性風俗女性」と「奥様」に分けられるのに、男性は「買う男性」と「買わない男性」もしくは「セーフター・セックスをする男性」と「セーフター・セックスをしない男性」に分けられないのか？そもそも、健康を心配するなら、感染率の高い「性風俗女性」たちの健康がまず気かけられるべきではないのか？そんな疑問が次々とわいてくる。

売買春の是非については多くの議論がなされてきたし、それを整理すると長くなるからここでは立ち入らない。けれども、セックスワーカーがこの社会にたくさん存在することは事実だし、今の日本から性風俗産業が簡単になくならないとは思えない。当たり前なことだがセックスワーカーは人間である。痛みも感じるし、悲しみや不安、苦しさも感じる。ウイルスに感染して病気になることを気にしない人間ではないし、病気になってもしかたがない存在でもない。もし万が一彼女たち（または彼ら）がそういう存在だとみなされるなら、買う人間もまたそうみなされるべきだろう（2）。

社会防衛というとき、敵としてまたはスケープゴートとして社会の外に出される集団は誰か。新聞の書き手と読み手でつくられる「われわれ」から、はみだされるのは誰か。ジェンダーとセクシュアリティについて考えるときには、必要不可欠な問いである。

そして、その「われわれ」が暗黙の前提として語らない思考の枠組みや分類法。その自明性を疑ってみること。そこが、ジェンダーやセクシュアリティの痕跡を見出す一番の場所であり、方法である。

この新聞記事と同様の視点は、公衆衛生パラダイムにもとづいた感染症予防対策においても幾度となく繰り返されてきた。エイズ対策において、従来のアプローチは無惨な失敗を招き、ようやくパラダイム変換がおこりつつある（3）。あまりにも遅すぎる変化にならなければよいのだが。

2. 女性の交換

似たようなこと、つまりある集団が「書き手」と「読者」の双方から排除されること、その集団に属する人間の苦悩や意味づけがまったく考慮にされないということは、気をつけて探せばそれほどめ

ずらしくはない。学問領域での基礎的理論、成典（キャンノン）の中にもそれらは多く含まれる。

たとえば、人類学において贈与交換は、集団間の互酬性を成り立たせ、開かれた社会システムを維持する重要なコミュニケーション手段であるとされる。そしてレヴィ・ストロースによれば、婚姻と親族関係の規則は集団間での女性の贈与交換とみなされ、インセスタブーム、以下のように説明される。

近親婚の禁止は、母、姉妹あるいは娘を娶ることを禁止する規則であるよりはむしろ、母、姉妹あるいは娘を他人に与えることを強いる規則である。それはすぐれて贈与の規制である。あまりにもしばしば誤解されてきたまさにこの局面こそが、その禁止の性格の理解を可能にするのである。（４）

私は、この理論を学んだとき、じゃあ、贈与される女性にとっての互酬性って何なの？それなりのギブアンドテークはあるわけ？と思わずつつこみを入れたくなくなってしまった。社会システムを維持しようとする主体、互酬性を期待する主体は常に男性なのだろうか。としたら、贈与される女性から見たとき、社会とは、構造とは、何を意味するのだろうか？贈与された先の集団でその女性は何を感じ、何を喜び、何を憂うのだろうか？構造主義の理論において、社会の成員が何を感じ、何を喜び、何を憂うのかなど問うこと自体が間違いなのか？

女性の交換という理論に対する「女性蔑視」という批判については、レヴィ・ストロース自身、反論している（５）。おそらく蔑視ではないと私も思う。しかし、理論は男性の、それも底辺ではなく頂点で社会を司る男性の、もしくは社会を概観できる外部の男性の、視点から形成されているのは確かだと思う。レヴィ・ストロースも構造の一要素であり、彼の解釈もその構造から限定されざるをえないことの証明だともいいうるが。

ここでも、このトピックに関する人類学での多くの議論を逐一紹介する余裕はない（６）。ただ、交換される女性の視点から互酬性を考え、構造を考え直したならば、構造主義や、人類学の親族理論そのものが全く異なって見えてくる可能性があることは示唆しておきたい。今はやりの「移動」「離散」「混雑」といったポストコロニアルな現象を大前提として捉えうる構造の可能性。移動と離散を運命づけられた女性からみれば、土地や集落を基本軸としない、空間的同一性に基づかない「帰属集団」や集団間の構造がみえてくるかもしれないではないか。

3. フェミニズム

ジェンダーとセクシュアリティをめぐる理論は、主にフェミニズムを土壌として、ここ20・30年余りの間に大きな発展を遂げてきた。フェミニズムは、差別や抑圧や搾取から解放されたいと願う女性の運動から始まり、やがて理論的な発展と精緻化をすすめ、学問としての一分野を築いた。中でも精緻化されたのが、ジェンダーとセクシュアリティの概念であり、それらはフェミニズムという領域を越えて、あらゆる学問にその基本的枠組みの再考を迫る（７）。

フェミニズムの動力源の多くは、固有の経験にねざした苦痛や問題意識にあった（だからこそ運動の側面をもち、学問との「両立」が危ぶまれたりすることもあるのだが）（８）。「固有の経験」を絶対視する必要はない（９）。しかし、そこからくる苦痛や問題意識は、位置（ポジショナリティ）の政治学を鋭く見抜く力をもつ（１０）。誰が、誰に向かって、何を語っているのか。語り口や問題設定の前

提にはどんな共同体幻想があって、そこからはずされるのは誰か、声を封じられるのは誰か、語られないことからは何か。

そのような問いから、フェミニズムは今まで問題（issue）とされてこなかったことを、問題として可視化することに貢献してきた。セクシュアル・ハラスメント、ドメスティックバイオレンス（DV）、家事・育児・介護などの「不払い労働」（unpaid work）、名前がつけられることで、ようやく見えてきた問題群（11）。いったん可視化されれば、それらを抜きに以前は議論がすすめられていたということが不思議にさえ思えてくる。

そして、国家、開発、環境、国際政治、科学技術など一見「女性問題」と関わりがなさそうな領域においても、ジェンダーやセクシュアリティの観点に基づく分析の重要性が認識されるようになってきた。例えば、国連開発計画は1995年の報告で、ジェンダー、リプロダクティブ・ライツ/ヘルス（性と生殖の権利と健康）、エンパワーメントを3つのキーワードとして取り上げている。そして、従来の「母子保健」のパラダイムにあるような「保護されるべき母」という援助対象ではなく、主体性をもち、社会文化的障壁から解放され、内在する力を発揮する女性像が、世界の開発問題の解決に不可欠であることを説得力を持って示した（12）。

4．抵抗

フェミニズム理論のインパクトの大きさは、位置の政治学を問題にすること、語り手の暗黙の前提を問い直すことという、二つの方法論に修練することができるように思う。つまり、何を語るかではなく、どんな位置から誰が誰に語るか、どのような枠組みのもとで語りが始まるかを問題にし、そこに議論をずらしていく方法である。そこで初めて、関係性における不均等が、かすかな痕跡からあからさまなものとなって現出してくる。これはジェンダーやセクシュアリティに限らず、エスニシティや障害者などあらゆる意味においてマイノリティとされる人たちが行使しうる貴重な手段ともいえる（13）。

当然のことながら、この手段は相手からすれば、理不尽な個人攻撃のようにみえるかもしれない。語りたいことは語らせてもらえず、語る必要のない会話以前の共通理解（と思いこんでいたもの）についての説明を迫られるのだから。自分の想定していない方向から質問が来ることは、けっこう恐怖である。トピックではなく、何かを当然とみなす自分自身の思考を批判対象にさせられるというのも、苦痛を伴う。それは本当は個人攻撃ではなく、社会における男女の関係のあり方やそこでの論者の社会的位置を問うことにすぎないのだが、それでも自分の価値観や生活規範といった私的領域をきれいに切り離せるかということ、そうではない。個人的なことは政治的であり、政治的なことが個人的であることは、既得権益の大きい人ほど無意識に察知せざるをえないだろう。

これ以外にも、ジェンダーとセクシュアリティを社会哲学する上で抵抗となる要素はいくつかある。ジェンダーとセクシュアリティは、従来、私的領域の問題であり、公の場で議論することではないと考えられてきた。ジェンダーについてはこの状況は様変わりしたし、セクシュアリティについてもずいぶんタブー意識がゆるんできている。けれども、まだ公的場でセクシュアリティについて語るという行為自体が色づけされてみられる現象はなくなっていない。普通、議論というのは、内容について詳しい人が専門家として一目置かれるはずなのに、性に関しては、詳しくったり、公の場で平気で語

ることのできる人の方が人格が疑われ、議論から疎外される傾向がある。性そのものに対する嫌悪感を持ったまま議論に加わっている人がどれほど多いか、一度振り返ってみる必要があるといえよう（14）。

また、ジェンダーとセクシュアリティをめぐる問題は、常に論理だけではなく、感情、そして身体性がついてまわる。自分の感情や身体性に無関心であったり、論理と感情、そして身体性を解離させたまま、まともな論議をできるはずがない。けれど、これまで公的な論議というのは、感情や身体性をできるだけ排除して成り立ってきた（15）。他者の感情や身体性だけではなく、自分の感情や身体性をも議論の俎上にあげることや、認知レベルだけでなく、感情的レベル、身体性のレベルにまで変革を求められることに、躊躇を感じない人間はどれくらいいるだろうか？

ジェンダーやセクシュアリティについて社会哲学するということはおそらく、「公的な場でジェンダーとセクシュアリティを語る行為」に付与される意味を意識化すること、相手の問いかけを個人攻撃とみなしたり過度にディフェンシブ（防衛的）にならないよう努力すること、自己の思いこみや思考枠組みが覆されることにむしろ快感を覚えること、を含むことになるだろう。そもそも学問とは本来そういうものではないだろうか？

と、偉そうにいうものの、わたし自身かつては、「なぜわざわざ男女に分けて考えないといけないの？なぜ女性だからって女性問題を考えないといけないの？男性だって虐げられている人はいっぱいいるでしょうに。」と思ってフェミニズムを避けていた。そして、フェミニズムに触れるようになってからも「確かに賃金格差とか性別役割分業とかは理不尽で差別的で重要な問題だけど、なぜ、セクシュアリティといった社会と関係のないことまで、議論の対象としなければいけないの？それよりもっと先に解決しないといけないことってあるんじゃないの？」と思っていた時期が結構長い間ある（16）。

ジェンダーは些末事、セクシュアリティは社会と関係のないことだという認識はまだまだ社会に根強い。そう言い訳して、語らずにすますという戦略もまだまだ多用されている。まず、そこを見抜こう。見抜いてしまえば、仕事はもう半分以上達せられたと同じである。

5. 最後に

ある研究会の後の懇親会で、従軍慰安婦の議論になったことがある。相手は結構有名な法哲学者。詳細な議論の流れは忘れてしまったが、その中で、わたしが啞然として議論を続けられなくなったことがあった。それは、以下のような彼の主張だった。

……でも、もし上官が、自分たちの部下が欲求不満で荒れているのを見て、このままだと現地の一般市民を襲いに行くか、自分に反乱を仕掛けるおそれがあると判断したら、慰安所を設置して不満を発散させようとするのも一理あるのではないか？」

女性は慰安婦に同一化してその苦痛を語り、男性は兵士の立場で「必要性」や「どうしようもなさ」を語る。それくらいなら私にも予想できたのだが、自分を上官の位置におくという議論の前提は私の想像範囲を超えていた。自分＝上官の性欲は柵に上げ、もしくは理性で制御可能であるかのようにみなし、部下の兵士の性欲を危険なものともみなすのはなぜか？そもそも一兵士でなく上官の位置に自分を当たり前のようにおくのはなぜか？

友人にその驚きを話したら、それってエリートの政策決定者にとってはいちばん考えやすい視点なんじゃない？とあっさり返されてしまった。国家政策や軍の管理という意味では、たしかに当然の視点なのかもしれない。上官の視点からものを見ることを思いつかないわたしのような存在が、彼らにとっては想像できないのかもしれない。けれどもある視点をとった時点で、結論というものは一定方向に定まってしまう。

いや、上官の視点を徹底的に暴いてみるといいのかもしれない。視点だけではなく、身体性と感情をも含めて上官のもつリアリティを現象学的にみていけばいいのかもしれない。無色透明の統率者の視点に潜む性欲や攻撃欲、支配欲や破壊欲、「被害妄想」や恐怖(17)がそこでは明らかにされることだろう。上官と一兵士との関係やその配置の政治性も見えてくるだろう。一兵士の視点から上官を描写することも可能かもしれない。慰安婦問題は優れて男性問題であり、おそらく21世紀の最大の課題は「男性性」の解明になるだろう。

本章では、ジェンダーとセクシュアリティの概念の説明、その歴史的変遷、ジェンダーとセクシュアリティとの間の関係など、おそらく基礎知識として説明されるべき内容についてはすべて割愛した。ジェンダーとセクシュアリティをめぐる議論は、上記のような展開を示すことが往々にしてある。そこで啞然と立ち往生するのではなく、自分の感じた違和感や驚きや怒りを大切にすること、そこから問題の設定や議論の開始点に戻って違和感を掘り下げていくこと。それが私の唯一身を持って伝えられるアドバイスである。

【文献】

1 読売新聞 1998年12月5日朝刊

2 売買春については、

フレデリック・デラコステ、プリシラ・アレキサンダー：セックス・ワーク・性産業に携わる女性たちの声 パンドラ 1993

リン・リーン・リム 編/著 セックス「産業」・東南アジアにおける売買春の背景・日本労働研究機構 1999

松沢呉一、スタジオ・ポット編『売る売らないはワタシが決める』ポット出版 2000

等参照のこと。

3 松田正己,HIV感染症の啓蒙活動,p225-232,小早川隆敏編『国際保健医療協力入門』国際協力出版会 1998

4 C・レヴィ・ストロース(馬淵東一・田島節夫監訳)『親族の基本構造』番町書房 1978(1949)

5 C・レヴィ・ストロース(川田順造、荒川幾男他訳)『構造人類学』みすず書房 1972(1958)

6 M.Z.Rosaldo and L.Lamphere, eds., Woman, Culture and Society. Stanford University Press Stanford 1974

Rayna R. Reiter ed. Toward an Anthropology of Women. Monthly Review Press, New York 1975.

Ruth Behar and Deborah A.Gordon eds.: Women writing culture. University of California Press 1995 等参照のこと。

7 たとえば以下のような文献が参考になる。井上俊、上野千鶴子、大澤真幸、見田宗介、吉見俊哉(編)岩波講座 現代社会学 第10巻 セクシュアリティの社会学 岩波書店 1996

- 井上俊、上野千鶴子、大澤真幸、見田宗介、吉見俊哉（編）岩波講座 現代社会学第 11 巻 ジェンダーの社会学 岩波書店 1995
- 富山太佳夫 編 フェミニズム 研究社出版 現代批評のプラクティス・3 1995
- 大越愛子、志水紀代子 編著 ジェンダー化する哲学・フェミニズムからの認識論批判 昭和堂 1999
- 8 田中美津：いのちの女たちへ とり乱しウーマンリブ論 田畑書店 1972（河出書房新社 1992）
女たちの現在を問う会編：全共闘からリブへ インパクト出版会 1996
- 溝口明代、佐伯洋子、三木草子（編）：資料日本ウーマン・リブ史 I. ウィメンズブックストア松香堂、京都（1992）
- 9 Scott, Joan W: "The evidence of Experience." Critical Inquiry 17:773-797, 1991
- 10 宮地尚子：フィールドの入り口で：あるいは文化精神医学らしさという呪縛 文化とところ 2-3,230-237、1998
- 宮地尚子：難民を救えるか？ 稲賀繁美編 異文化理解の倫理にむけて 269-286 名古屋大学出版会 2000
- 宮地尚子：「想像力と意味：性暴力と心的外傷試論」 江口重幸ら編「文化精神医学は精神医療を救えるか」金剛出版（印刷中）
- 11 レノア・E・ウォーカー（齊藤学、穂積由利子訳）：バタードウーマン。金剛出版。東京(1997)
Charney DA, Russell RC: An Overview of Sexual Harassment. Am J Psychiatry 151(1):10-17. (1994)
- 宮地尚子：現代社会と女性のメンタルヘルス 高畑直彦・三田俊夫編 臨床精神医学講座第 23 巻：多文化間精神医学 p99-110 東京、中山書店 1998
- 12 国連開発計画（編）：UNDP 人間開発報告書『ジェンダーと人間開発』。 国際協力出版会、東京（1995）
- キャロライン・モーザ：ジェンダー・開発・NGO・私たち自身のエンパワーメント 新評論 1996
- 土佐弘之：グローバル / ジェンダー・ポリティックス 国際関係論とフェミニズム。世界思想社 2000
- 13 宮地尚子：異文化のメンタルヘルスとマイノリティコミュニティ 宗像恒次編「多文化社会に生きる：心の危機と自己成長」垣内出版（印刷中）
- 14 性暴力について議論しようとする「そんな卑わいなことについては、ボクは詳しくありませんから」といった反応がよく返ってくる。性被害を受けた人の精神的ケアが専門である精神科医の友人は「先生って、お好きなんですね」といわれたりする。また、研究用に書籍を注文しても「これ、研究書ですか？」と変な顔をされることも多い。そういった現状をも分析に含める必要がある。このほか、「愛があればセックスは美しい」というのも、性蔑視や嫌悪の一種ではないだろうか？
- 15 北川東子「「自分の身体（からだ）」というテーマ」大越愛子・志水紀代子『ジェンダー化する哲学』pp48-75、昭和堂、1999
- 16 宮地尚子：揺らぐアイデンティティと多文化間精神医学 文化とところ 3.2.92-103、1999
- 17 落合一泰：東方の脅威、ワイルド・マン、インディアン、グリーザー 「新たな人間の発見」141-180、岩波書店 1997
- 鄭暎恵：自分たち自身に怯える「対人恐怖症」 117・122頁 内海愛子・高橋哲哉・徐京

植 編 『石原都知事「三国人」発言の何が問題なのか』 影書房 2000